

---

# 赤と青の神話 二章

深江 碧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤と青の神話 二章

### 【Nコード】

N3275Y

### 【作者名】

深江 碧

### 【あらすじ】

森の化け物を退治できなかった三人は、南の王の下に帰ってくる。そこでクロフは王に懇願する。自分に一年の猶予が欲しいと。その間に、腐った土地を開墾し、作物の実る土地にしてみせると。王は条件を飲み、クロフは数人の奴隷と共に土地を耕し始める。やっと二章です。もう正直、どこの文章から直せば良いのかわからないです。よって、そのままに近い形で載せています。ごめんなさい。

## 光と影

### 二章 光と影

城下町では三人の馬が遠くの荒野に見えると、民衆は三人の英雄が化け物を倒し、無事返ってきたと思いきんだ。

そしてその姿を一目見ようと門に詰めかけた。

そのため彼ら三人が城門に着く頃には、屋台や露店が軒を連ね、大通りに人があふれ、城下町はお祭り騒ぎだった。

南の国の民は森の化け物が退治された喜びに沸き、街は明るい雰囲気にも包まれていた。

フィエルナ姫は、城壁の前で未来の夫となる若者を不安と期待の入り交じった面持ちで出迎えた。

戸惑ったのは三人の方だった。

城壁の前で姫や街の人々に出迎えられ、どう応えていいのかわからなかった。

フィエルナ姫が安心したように、馬上のクロフを見上げ尋ねた。

「皆様が無事で何よりです。森の化け物はさぞ手強かったでしょう？ お怪我などされませんでしたか？」

クロフが困ったように頭をかき、馬から下りようかと迷っていると、ヒーネが馬から飛び降り、フィエルナ姫に駆け寄った。

「ええ、そうなのですよ、姫。わたしは二人を従え、あの恐ろしい森へと入っていったのです。しかし化け物めはわたしが来るのが前もってわかっていたのか、恐れをなして森中に罾を張り巡らせたのです」

フィエルナ姫は不安そうに胸の前で両手を組んだ。

ヒーネはその白い手を取って握りしめる。

「しかしわたしは勇敢に進み、数々の罾をかくぐり、数多の難題

を解決し、森の奥へと進んでいったのです。すべては姫と南の王様のため。わたしはそれだけを思い、戦い抜いたのです」

馬上のクロフはヒーネの話に聞き入っているフィエルナ姫や街の人々を見回し、隣の馬に乗っているケーデインを肘でつついた。

「今のうちに王の館に戻りましょう。あなたの目の怪我もありますし、領主様とも急遽相談したいことがあります」

クロフは城門の前の人々に気づかれないように、こっそりと馬を進め、城壁を回り込んだ。

城壁の石壁にそって歩き、クロフは裏門を目指す。

クロフは目が見えないながらも不機嫌な顔で後ろを付いてくるケーデインに話しかける。

「もしも、すべて本当に上手くいったら、この土地も元に戻り、あなたの目も治るかもしれません」

## 光と影 2

今まで口を引き結び黙り込んでいたケーデインはゆっくりと顔を上げる。

「本当か？」

馬の歩みに揺られるようにして、クロフは黙ったままごつごつした城壁の石垣を眺めている。

「すべて、上手くいったら、ですよ。もちろん、そんなに上手くいきつこないことくらい、ぼくにもわかってはいるんですけどね」

クロフはそれきり口を閉ざした。

城壁を渡る風が荒野の草花を揺らし、青空の彼方へと吸い込まれていった。

苔むした日陰の道を通り、二人は鉄格子のはまった裏門にたどり着いた。

門の前には二人の衛兵が鎧甲を身につけ、槍を構えて立っている。クロフは衛兵にケーデインの怪我のことを話し、裏門を開けさせた。

門を通り、白い石柱の立つ中庭に出たところで、ケーデインは感心したようにつぶやく。

「あなたの口の上手さもなかなかのもんだな。あの貴族のぼつちやんと引けを取らないくらいだ。まあ、あなたの方はぼろを出さないだろうがな」

ケーデインは手綱を握り直し、口元に笑みを浮かべる。

森から帰ってきて以来、初めて見せた和らいだ表情だった。

「嘘は付いていません。ただ必要なことしか口に出していないだけです」

クロフは苦笑いを返す。

白い石畳の敷き詰められた中庭を抜け、二人は城の入り口に馬を止める。

クロフは城の小姓と二言、三言言葉を交わし、馬の手綱を手渡した。

召使いに案内され、二人は城仕えの薬師の部屋に通された。通された先は薬草の匂いが立ちこめる、薄暗い部屋だった。

天井や部屋の壁には様々な色の植物がつるされ、赤い炎の揺らめく炉には大きな鉄鍋がかけられている。

薬師は白髪の痩せた老人だった。

二人の怪我を見るなり、棚から毒々しい薬の壺を取り出す。

二人とも打ち身や擦り傷だらけだったので、薬師の塗ってくれた塗り薬が傷に染みて危うく悲鳴上げそうになった。

薬師が目を見張ったのは、大蛇の毒液を受けたクロフの腕とケイデインの両目だった。

クロフの手首からひじまで、炎に巻かれたように赤く焼けただけ、ひどい水ぶくれを起こしていた。

「こんな大怪我で、お主、よく今まで平気じゃったのう」

薬師の話を聞いてケイデインは顔色を変える。

「おい、お前、そんな大怪我を、どうして今まで放っておいたんだ  
！」

ものすごい剣幕で怒鳴られ、クロフは笑いを返す。

### 光と影3

「手持ちの薬草は限られていましたし、あなたの両目の処置のほう  
が大事でしたから」

こともなげに言い放つ。

「だからつてな、お前！」

ケーデインはクロフに詰め寄ろうとしたが、白髪の薬師に止めら  
れる。

「怪我人同士が喧嘩するでない。そつちのひよろつこいの怪我は、  
骨まで溶けていないのが不思議なくらいの重傷だし、筋がいくらか  
切れているから、多少の不便が出るかもしれぬな」

薬師は部屋の隅の清潔な白布を持ってきて、それを広げる。

「このでかいのはかなりの重傷だな。両目とも視力を失っており、  
わしの持っている薬草や、過去の文献からでは、こいつの両目を治  
すのは不可能じゃな」

わかつていたこととは言え、いざ目の前ではつきりと告げられ、

ケーデインは肩を落とした。

治療が終わると、二人は老薬師に礼を言つてその部屋を後にした。

長い城の石畳の廊下に二人分の靴音が響く。

城にはほとんど人の気配が無く、薄暗く静まりかえっていた。

窓の外の城下町の方からは、人々のにぎやかな声が風に乗って聞  
こえてくる。

「あの貴族のぼっちゃんはまだ城門のところにいるのか？ 森の化  
け物も退治していないのにいい気なもんだ」

ケーデインはクロフの肩を借り、ゆっくりと薄暗い廊下を歩いて  
いく。

「森の化け物について触れられたら、彼はどう答えるつもりなんで  
しょう？」

クロフは苦笑いを浮かべる。

「さあな。貴族どもの考えることは、いまいちよくわからん」

ケーディンはどうでもいいことばかりにはき捨てる。

クロフは廊下を進み、曲がり角を曲がる。

城内の召使いがほとんど出払っているため、領主の部屋までの道のりは、二人の記憶だけが頼りだった。

しかしクロフは立ち止まったり、長く迷ったりすることはなく、廊下を進んでいった。

「おい」

三つ目の曲がり角を曲がったところで、ケーディンが声をかける。

「お前、さっき言ったことは本当なんだろうな？」

クロフは足を止め、わずかに顔を上げる。

「城門の外で言ったことだよ。おれの目が上手くいけば治るとか、何とか。あれは本当なのか？」

クロフは一瞬だけためらうように、光の差し込む窓の外を眺める。

「ええ、そうです」

ケーディンの口から喜びの音が漏れる。

「やった、本当か？」

## 光と影 4

クロフはしばらくの間黙り込む。

「しかし、それはとても困難なことです。下手をすれば、あなたの両目は永久に治らず、ぼくも命を失うことになるかもしれません」

ケーディンは喜びの声を慌ててのどの奥に引込める。

その時、ケーディンの両目はすでに光を失っていたため、その時クロフがどんな表情をしているか、赤金色の瞳に絶望にも近い暗い炎を映しているのにも、もちろん気づかなかつた。

「詳しくは言えませんが、それはとても長い時間がかかるかもしれません。それでもいいですか？」

ケーディンは少しの間考える素振りをしていたが、大きくうなずく。

「まあ、ちつとはおれもため込んでいるしな。故郷に帰って、妹や弟達とつつましく暮らせばしばらくは何とかなるだろう」

ケーディンは豪快に笑う。

ケーディンの明るい様子を見て、クロフの口元にも笑みがこぼれる。

それからしばらくの間、ケーディンのたわいない話が続いた。

両目が治ると聞いて、気分が高揚していたのだろう。

彼はもっぱら故郷に残してきた妹や弟達のことについて話した。

荒野のヒースが夏の太陽を受けて紫色に染まる頃、故郷に戻るといつも一番初めに蜜蜂達のうるさいくらいの羽音にでむかえられるという。

早くに両親を病で亡くし、長兄である彼が妹や弟達の面倒を一度に見てきた。

彼は家計を助けるため、村を出て様々な仕事をやってきた。

街から街に移動するうちに、生まれ持った体格の良さと腕っ節が認められ、地方の権力者の護衛などを務めるようになった。

森の化け物のうわさ話はその時に聞き、一山当てようとやってきたという。

クロフはケーデインの話に相槌を入れ、廊下を歩きながら聞いていた。

しかしその横顔に時折ひどくつらそうな表情が浮かんでいたのを、盲目のケーデインは気付かなかった。

領主の部屋の少し手前まで来ると、クロフはケーデインから腕を放す。

「では、ここでお別れです。あなたは最初に領主の部屋を訪ね、森での出来事や、化け物についてのことを事細かに話してください。そしてその化け物に一太刀浴びせたこと、その代償に両目の視力を失ったことを話してください。そうすればいくら薄情な相手であれ、人々の手前、いくらかの報奨金がもらえるはずですよ。あなたはそれを持って故郷に戻ってってください」

ケーデインが抗議の声を上げる。

「おい、それは違うだろ！ 化け物はお前が」

「いいんです」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3275y/>

---

赤と青の神話 二章

2011年11月10日07時08分発行